

# 平安朝の女性の愛と生き方

安西篤子

今日は、物書きとして、わたしと古典とのかわりみたいなものをお話ししたいと思います。

私など本を読みますと、すぐ感情移入していきまして、そこに出てくる人たちとか、あるいはその本の著者と話してみたいと思うのです。私は一体古典の中で何が好きか、どういう著者なら会ってみたいかということ、時々考えてみるのですけれども、はつきり申し上げて、『蜻蛉日記』が好きなんです。私が、『蜻蛉日記』『蜻蛉日記』と言って騒ぎますと、自己顕示欲が強くて、やきもちやきで、ヒステリーで虚栄心が強くてあんないやな著者はいないのではないのでしょうか、というふうに言われます。そのことは男性から言われるだけでなく、ものを書く女性でもそういうふうにおっしゃる方がありますが、私にはどうもそう思えないのです。なんとなく、『蜻蛉日記』の筆者の気持ちが変わってくるような気がするのです。

『蜻蛉日記』の筆者は、本朝三美人の一人と言われ、また和歌も夫に代わって詠むくらい上手な人でした。いわゆる才色兼備というわけで素晴らしい人物なのですけれども、ただその結婚生活はずいぶ

ん不幸でした。どこが不幸だったのか、別に夫が酒乱だったわけでもないし、経済的に困るわけでもないし、当時のことですから一夫多妻というのは当たり前で、特に彼女だけが夫に浮気されて悩んでいたわけでもありません。人間の不幸不幸というのはちょっと決められないで、本人が不幸と思っていれば、それは不幸せな状態といえると思います。

この『蜻蛉日記』の筆者というのは、平安時代の多くの才女の中で、ただ一人専業主婦だったので。当時はもちろんそういう言葉はないのですけれども、彼女は宮仕えの経験がなく、一生一人の夫を守って自分の家にいました。それから、もう一つ不運であった点は、彼女に娘がいなかったことです。平安時代はご承知のように大貴族達は、自分の娘を、お后候補として育てるわけです。当時は公家社会で、京都に朝廷があり、朝廷を中心に世の中でできあがっていました。そして自分の娘を帝あるいは東宮にさし上げて、そこに子供が生まれると、これが次の東宮なり、帝なりの位につくことを望んでいたわけです。

この『蜻蛉日記』の筆者の夫は藤原兼家というひとで、兼家のお父さんは師輔と言ひ、権力を握る土台を築いた人だと思つたのです。しかし、師輔自身がいかにか政治家として、立派であつてもちゃんとした娘をもち、この娘が宮中に上がつて皇子皇女を生むということにならないと、父親の権力も強くならない。

それではどうして、外戚がそれほど力を得ていたかという点、当時は母系社会で、女は自分の家に生まれ育つて、ずっとそこで暮らす。子供も母方で育てられる、その結果まず赤ちゃんが、最初に触れ合う人たちというのは、母方の祖父祖母であり、おじおばであるわけです。

その赤ちゃんが東宮になり、帝になると、自分の親しい外戚、外祖父祖母やおじおばたちを、重んじるというのは当然だつたと思ひます。『源氏物語』を例にとると、紫式部という人は光源氏を当代最高の男性という風に考えたとわけです。彼は遠慮して帝の位にはつかなかつたけれども、それに準ずる太上天皇という形をとつたわけです。源氏の終わりの方の六条院、これは考えてみると宮中に模してあるわけで、当時の帝もやはり他の貴族たちと同じように、結婚というのは夫婦と一緒に住むという形ではなくて、男が女の家に通う、通い所をもつという形をとつていたわけです。帝も自分の家へ入を迎えるのではなくて、自分の愛するお后たちところへ通うという形をとらなければいけなかつたのです。ところが、日本の帝というのはまずお祭が大事な仕事で、宮中に内侍所があり、鏡が飾つてあります。神様から戴いたという神鏡で、この鏡をお守りするというのが、当時の帝の大事な仕事であつたわけですから、夜家をあげたりするのは、不穩当であつたのです。

そこで清涼殿から出て、夜よそへ通うということが出来ないの仕方なく清涼殿の後ろの方にいわゆる承香殿とか、藤壺、桐壺という御殿を設けて、そこへお后たちを呼んで住まわせていたわけでした。

源氏の最後に住まつた御殿を考えてみると、あそこには紫の上、それから梅壺女御も休み所をつくつていたとおもいます。また、明石の上とかいろいろの女性たちが、それぞれの町に住んでいて、光源氏はそこを回るといふ形をとつていました。

野分という章がありますが、今で言えば台風で、台風見舞いをするために息子の夕霧を連れ回つています。あれなども紫式部はわざわざそうは書いていないけれども、何となく彼が帝と同じような形をとつて妻たちと暮らしていたという、そこにかに紫式部が彼を最高の位にまで押し上げようとしていたかということがわかると思ひます。

話がそれてしまいましたけれども、この『蜻蛉日記』の筆者にもし女の子が生まれていたら、おかあさんに似て美人で、才能もあつたでしようし、きつと宮中へ上がつて帝に愛されて、皇子か皇女を生んでいたかもしれせん。

『蜻蛉日記』を読んでみますと、当時の夫婦関係ばかりでなく、親子関係もよくわかります。現代は、父親不在ということを言われて、昔はどうでしたかとよく聞かれますが、父親は当時も不在でした。それこそ通い所の時代には、父親は子供の養育には、ほとんど関係していません。言わば生まれませつばなでしたわけですね。自分の愛する女性が子供を生んで、その女性に対する愛情が残つている場合には、子供に対しても愛情を注いでいたけれども、その女性に飽きたとか、いろいろな事情でもう通えなくなると、その奥

さんも子供もそのままにされてしまう。しかもそれは、別に不道徳ということではなかったわけです。

兼家と、『蜻蛉日記』の筆者の間に生まれた道綱との関係を見ると、まず行ったのは就職の世話です。道綱がある歳頃になると、殿上つまり御殿へ出仕をする。そのために兼家は服装とか、礼儀作法というものを教え込んで、自分が車へ乗せて連れていく。それから彼が歳頃になって、結婚しようということになると、この筆者と兼家の中には夫婦関係は消えており、いろいろ相談をするにも蜻蛉の筆者は夫である兼家に手紙を出し、また兼家の方もそれに手紙で答えたりしています。

こういう話をする、男の人は昔はよかつたといつて、にこにこするけれども、『蜻蛉日記』を読めば、どういふふうにして昔の結婚が成立したかということは、分かるかと思ひます。

結婚は、まず男性が女性にラブレターを送り、それに必ず歌をわけます。そのラブレターも方々へ送り、数も多いので受け取る方も最初は真剣に感えないで、相手はどのくらいの気持ちかを、見るという感じであるわけです。その手紙が再三来まして、どうも本気らしいということが分かる、まず自分に仕えている侍女や女房たちが代わりに返事を出す。最初は、「そういう者はおりません、おかど違ひでしょう」といつて断り、それでもなお熱心に言い寄ってくる、今度は当人が返事をする。だんだん結婚に近づいていくわけです。このような、自由恋愛も多かったかと思ひますけれども、一応は親同士が決めた縁談というのが、一般的であつたらしく、蜻蛉の筆者の場合もまず父親に、兼家が申し込んでいます。

そしていよいよ結婚ということになると、夜行くのです。日が暮

れ落ちてから、男性はお嫁さんの家へ行く。もちろん正式の結婚ですから、決して忍んでいくわけではないけれども、昼間は結婚しないのです。

花嫁さんが家の中に入りますと、そこに花嫁さんの男兄弟が待つていて、花嫁さんの部屋まで案内する。昔の寝殿造りの家というのは、広いところでがらんと置いて、畳も全部は敷いていない。置き畳でカーテンとか几帳とか屏風で仕切りをするわけです。そこでその家の人が案内して、二人が新婚のベッドで休みます。衾覆ふすまほりといふのですが、布団を母親にかけてあげる。何しろ非常に早婚で、早い場合は十代で小学生くらい、遅くとも高校生くらいの若夫婦ですから、いろいろと面倒をみるわけです。そして花嫁さんの両親は花婿の覆いてきた沓を抱いて寝るのです。足止めをして、どうか家にばかり来てくれるようにといふおまじないで、新婚の部屋から少し離れたところで、果たしてうまく行くかどうかと心配しながら窺つているわけです。

花嫁の家に男性を迎えるというのは、よくできた制度で、自分の家なら両親も近くにいるし、住み慣れた家ですから、何の不安もない。そういう所へ男の人を迎えるということは、当時の女性としては都合が良かったと思ひます。

そして、やがて夜が明けますと、男は帰っていきます。夜が明けると言ひましたけれども、本当に明るくなってからではいけないのです。これもやはり忍んできたという形で、未だ暗いうちに帰らなければいけない。光源氏が六条の御息所のところへ通つてきて、朝起こされてかえる場面がありました、そのとき光源氏はまだ十七歳。今なら高校生で、野球なんかして真っ黒くなって、走り回つ

ているくらいの年頃が、もうすでに年うえの、しかも未亡人を愛人にして、一人前に通っているのですから、本当に早熟だったと思います。しかし、いくら早熟でもまだ若いから、朝早く起きるのはつらい。それでねむいねむいと言っているのを無理に起こして帰してしまうというような場面があります。

ですから、当時の恋人たちは朝まだ情熱の燃えている相手と、惜しい別れをして家へ帰っていく。そういう時は、人間の感情はとき澄まされているから、見るもの全て心に深くしみいつてくるわけですね。そういうことから、当時の人たちは、朝の少しずつ明けていく状態に対して、それぞれ適切な言葉をもっていたように思います。曙とか、有明の月とか、暁とか細かく分けていく言葉を作り出したのは、やはりそんなところから来ているのではないかと思います。

帰ってくる、花婿さんの方はすぐ後朝ごあしたの文を書くわけですね。後朝の文というのは、万葉時代に恋しい人とやすんだあと、記念に着物を取りかえる。男も女もだいたい似たような着物を来ていましたから、それを記念に取りかえて別れる。それが後朝の別れであったわけですが、この手紙はなるべく早く書いた方がいいわけですね。帰りの車の中で書いて、使いに持たせたのではないかと思うくらい早く来れば、花嫁さんの両親はあゝ気に入ってもらえた、これはうまく行きそうだと思ふわけですね。しかし、中には花婿さんが家に帰ってもう一寝入りして、日が高くなつてから、やっと思い出して手紙を書く場合もありまして、こういう時はあまりこの夫婦の前途は明るくないということになります。

そして、次の晩また来て、さらにもう一晩、必ず三晩通うわけ

です。こうして三日通うと、ところあらはしと行って、いまの披露宴と変わらないような祝宴を張るのが一般的であったようです。

結婚はそんなふうですが、では別れる方はどうかというと、これは本当に簡単なんです。現在は書類を作って、市役所へ出さなければならぬのですが、当時は本当に簡単で、通つてこなければそれでいいわけです。

『蜻蛉日記』の筆者は結婚については、最初から非常に不安感を持っていたようです。もちろん日記といつても、その日その日を書いているのではなく、ある程度半生を終えてから自分の生涯を振り返つたわけです。もう結婚が失敗だったということが分かつてから書いているので、その不安感も当然という言い方も出来ます。しかしそれにしてもそのときの作つた歌とか、夫に対する態度を見ると、当時の通い婚というものが、いかに女性にとって不安定な要素を多く持っていたかということがわかります。

彼女は、最初是一条というわりあい内裏に近いところで暮らしていたけれども、その後父親の世話で広幡ひろはた中川なかつがわという京都の北の賀茂川の傍、郊外の方へ引越します。こんな遠いところへ移つてしまつたら、きっと夫の兼家はますます来てくれなくなるだろうと心配している、やはり彼は遠くなった忙しいということを口実にして、全然寄りつかなくなつてしまふのです。

彼女は若い頃ずいぶん夫の心を自分に引きつけようとして、いろいろな策略を弄します。夫が別な妻を持つたと知ると、大変憎らしがり、その女性が夫に捨てられたと分かると、いまでも胸あく、あかさっぱりした、いい気味だということをちゃんと日記に書いています。

小倉百人一首の中に、「嘆きつつひとりぬる夜のあくるまはいかに久しきものとかは知る」とありますが、これは夫が来た時に、戸を明けてやらす、わざとのようにすがれた菊にその歌を付けて、どうですか戸の開くのを待っている身はつらいでしょう、というようなことをいみやたらしく言っているわけですね。時には夫に冷たくしたり、時には彼が病氣をした時などは、そこまでわざわざお見舞いに行くとか、いろいろな才知とありつたけの手管を傾けて、彼の心を自分の方へ引き寄せようとしたのですが、失敗に終わってしまいました。ただ夫に捨てられたというだけではなくて、彼女自身の人生の一つの大きな挫折であったわけです。彼女のとしてはたしか三十九くらいです。今と違って、三十代のおわりといえはもう四十の賀といってお祝いをする、人生ほとんど終わつたくらいの感で、息子もそろそろお嫁さんを探すという年配でしたが、彼女は少女のように泣くのです。

こういうところを読むと、それまでどんなに鼻につくような嫌な面があったとしても、彼女は本当に真剣だった、本当に精一杯生きたと思ふのです。

最初の頃は、誇り高い女だったのが、やがて尼になると言つて山寺へ籠もつたりします。これは、京都の般若寺であろうと言われていますが、山のうえにあるその寺から見ると、京都の街の灯がちらちら見えて、当時としてみればすいぶん寂しい山の奥であったと思ふのです。

そこで尼になると言つて、夫を脅したのですが、夫の方が一枚上でさつさと連れ帰つてしまい、そしてであろうとか、彼は彼女にアマガエルというあだ名を付けるのです。尼になり損ねて帰ってきた

というわけですね。しかも彼女自身も、そのアマガエルというあだ名を、自分の歌の中に詠み込んだりしているのです。彼女の誇りは、一体どこへ行ったのだらうかと思ふくらいで、それを見ると可哀そうだなという気がします。

お正月に女の姉妹、親戚が集まつていろいろな唱歌をすることという部分があります。たくさんの着物が欲しいとか、どこそこへ物見に行きたいとか、それぞれ言い合ひ、お姉さんも言つてご覧ささいと言われて、この蜻蛉の筆者は「三十日三十夜はわがもとに」と言うのですね。三十日三十夜、ひと月まるまる夫が私のところに来てくれればいいのに、ということ、それで皆わつと笑つてお開きにしたという感じですね。私は、これは冗談として言っているところが、本当に可哀そうだなと思つてしまうのです。

だんなさまは、黙つていても家へ帰ってくるのは当然と私どもは考へてしまいますが、当時の女性たちはたまに来てくれることだけを待つて一生を送つていました。しかし、女の本音としては、夫の愛をよその女性と分けないで、自分だけで独占したいという気持ちがあるところにあつたのだなということが、『蜻蛉日記』を読むとよくわかるわけです。

蜻蛉の筆者のような専業主婦の愛情というものがある一方で、そうではない宮中を中心とした、非常に華やかな恋愛関係を描いたのが、清少納言の『枕草子』であつたり、紫式部の『源氏物語』であつたりするわけです。どうして平安時代に、たくさんの才女たちが輩出したのかといふと、これはやはり社会体制だと思ふのです。

紫式部が、女房として仕えた中宮彰子という人は、堅実で静かな生活を好み、清少納言が仕えた中宮定子は、明るい華やかな生活を

好む、それぞれに合った主人だったわけです。もし、この二人が別の主人を持ちましたら、あれほどお互いの才能の華が開いたかどうか判りません。そのへんに巡り合わせの不思議みたいなものを感じます。このように、女性でも、ものを書いたり読んだりできますと、それが彼女の箔になって、日の当たる場所へ出られるチャンスがあったわけです。

ところが、公家社会がだんだん衰退して、武家社会になると、これは本当に男の世界といえますか、男が一切を取り仕切っていて、女性はその陰で、それを支えるというような役割で、女性自身が日の当たるところへ出るというようなことはなかった時代であったと思うのです。ですから、もう才能のある女性が仮りにおりましたも、もうそれを示すような機会も巡ってきませんでしたし、そのまま埋もれてしまったと思われまます。

千年も前の『蜻蛉日記』を読んで、当時の夫婦のあり方がよく分かるというのは、考えてみると不思議な気がするのですが、後の鎌倉時代、あるいは室町戦国、江戸時代の夫婦のあいだ柄というのが、どうであったか私どもにはほとんど分からないのです。たとえば、豊臣秀吉の愛妾であった淀殿の、『淀どの日記』というのを井上靖さんが書いておられます。これは、もちろん井上さんの創作であって、本当の『淀どの日記』というものが残っていたら、面白かったと思うのですが、手紙の断片があるくらいで、日記というものは残っていないので残念です。

現代は、女性もだいたい、ものを言ったり書いたり出来るようになったので、これからは女性の生き方というものを、後世に伝えることも出来るのではないかと思います。

古典はこのくらいにして、付け加えますと、江戸時代の初期に、『葉隠』という書物が佐賀の鍋島藩で書かれています。山本神右衛門という戦国生き残りみたいな剛毅な武士が、自分の身辺に起こったことをいろいろ話して、口述筆記をしたものですが、この中にいろいろな話が出ていて、こんなことが書いてあるのです。

山本神右衛門の父親という人が、かねがね言っていたことで、女性には読み書きをしないほうがよろしい、読み書きをすると必ず姦通をするということです。そして、女はただ味噌誂い文くらいが書ければよろしい。味噌誂い文というのは、当時は自家製のお味噌を作つて、味噌蔵などに貯えてあったのです。しかし、お嫁に行つて自分のうちのお味噌が切れてしまったので、実家へ手紙を書いて使いのものに持たせ、お味噌を少し分けてくださいという文章ですね。それくらい書ければ、それでもうたくさんだということを書いているわけです。この一言が当時の武家社会における女性の地位と、それを、非常によく表していると思うのです。

それがいい、悪いということは別にして、そんな時代が長く続いて、その後現代があるということ、時々皆さんに思い出していただいて、大いに勉学に励んで、現代の清少納言なり、紫式部なりをめざして載くと大変結構だと思います。

(昭和六十三年六月二十五日、第二十三回文芸学会の講演から)